

027  
499  
1

田舟集





027  
489  
1

專女知家  
第 11561 號  
書 圖

11561  
148

庚辰の皐月若菜山の  
中乃とやう湖也  
はるしと海乃あはれふ

あまほの

木木

田舟集



まろや人も鷹さる子苗時 素磔  
皐月の泥とくち子 木木  
酒臭文伎の調也探すらん 磔  
吐息なつゝの唄於林まき 木  
けむの今朝もまての晨のよ 磔  
菊の香はうとみぬふ浪寄 木



大代孫玉小神の紋の若志は  
隣とまじへて純良久一よ  
おとくく無風は皆さしお  
以川くよ木と乃かつよあ新  
女ふも似せおありとさ歌ま  
かたへつと之神と年のと清さ  
一甲より二里の夜のりけま  
何ふ別れとさ花宮さか

木 槩 木 槩 木 槩 木 槩

清風屋よ福は半とめ唐の色  
よあ歌こころしおり花の穿髪  
あちよあまふまふとさるさ  
彼君はまき一藤足哉朝  
わさるも早よ古々の袖袂  
魚と川々あふおははらり  
意すてふ子は双帯のあて更  
むっも今も迷ふ思ひは

木 槩 木 槩 木 槩 木 槩

海木の法度ふ成り打もあれ  
奈まふ向ふく妹いふつよ  
借鏡の愛の浮世の業をしや  
若れを人生涯の孩  
弱法師も下戸小眼かゝり  
起て半日舟ても半日  
舟や長破神都の志持さ  
志てうい夜の挨拶もかし  
木 榮 木 榮 木 榮 木 榮

帯賣小葉菓の白しも持さくや  
持て吹るも饑削の心さ  
笑宗もあふと入家二人連  
齒を勃くはも年月さき也  
馬ぞおきお持し心も花  
うのやかなる多く種  
木 榮 木 榮 木 榮





いづれや神事書の取合せ  
思ひしくまは家穂進  
あかへてあかあかのさか  
雛の余波うつむけえん  
まかけし蒼もあめをきほく  
あきの煙ふかあけ起く  
やもくといさういさくを嘆き也  
あくらの夏小志家人がし

位 木 榮 位 木 榮 位 木 榮 位 木

そちをも後のあかあかぬ時  
まけよくと昔家穂の言  
あしわう續為津小湧をあ  
書とねて月代を判る  
口よと行へかアをお忘れ  
既痛々めくかアよ膏  
さうあへは月の光をのびる  
十日あまりの芳よ秋

位 木 榮 位 木 榮 位 木 榮 位 木



萩萩の肩をわくゝ家持言  
懐度て度 家 侍  
わが夜のゆゑさうかゝるやけ  
むきよて宗く竹の門口  
美の輝けをさうかゝるは  
あゝ家ゝゝへ 露甘樹葉

木 榮 位 木 檠 隱

水無月や湖に固き五時の交  
きりぬふ連の風ふほくあ  
よのへてふふ家人もあ  
連て子供の子よハ朔  
柱に淋しからせ日の暮ふ  
撰付をさしてぬ家のきり玉

子文 青位 木木 素檠 竹籠 文



静さや魚も物もあはれはり  
走のほめを誰とけり世  
三味線を贈む浪の荒きを  
恒小帯干し映の如影  
むらぶねくぬる夜  
酒呑ふし小鰻面う出系  
以年と惜かそも月と雲  
倒もてそよぶ雲の如焼

木 龍 文 木 榮

又浪走ぬ人を乃家振傳ひ  
おろふとふさの笑ひひ  
合点して三味線のも花の果  
遠と拂ふ乃のへの巻  
葉の戸の昼根の前黄ふき巻  
一夜せとりの老の事川新  
今日も浪の根の仁業で  
眼の和らうを真の心よき

新 文 木 榮 周 行 文 木 榮

かむむと脊の怒ぬくふ敷あり  
持交あり書いし海牙生  
むし其無言の尼も信しり  
佛し衆もまゝいふぬ時  
か合へん意をたれをたれし  
心ふりもたよ夕雲あり  
伝承くもと無門と月の照  
昔ちとほ提りりもた

木 榮 行 文 隱 木 榮 行

あちかか振まある林の境  
お口させし辭りるこり  
休是の間の水よ伽の役  
戦りとう川すけう又ふり  
善のまど一様又智る上元ふ  
層水解て世果あり

文 行 榮 木 隱 文



秋を水旱りいつくま  
里く小舟の幸のく  
戸摩子小舟の白ひのお誠て  
門の住もお家人のうち  
雑魚喰ふむら記お家朗朗  
や川の番と歌く南よの  
周行 禾木 正阿 万岱 青以 行

おくハ行ぶさる風の音  
舟のむらと替家一隅  
壁のふ援をさるお家  
上戸の船ハお家  
男と女と恨合えるも浮世也  
さるふも似ぬ編笠の破  
おの朝舟の歌く南よ  
壁もお一橋のま中  
木 阿 行 以 岱 阿 木 岱



六十の鳥は未年の飛脚舟  
渡りて鳥ふまみまふ  
ゆきやまやまのしんしの  
長閑か糸夜は犬の鳴  
うつくし己の日の枝渡つる  
尋て幸よさこの遊分  
爰之ハ男かかき藤汐子  
乃理ハ知まし今の高風

以 行 木 阿 行 木 素 行

さづかやにんし言葉ハ誰と誰  
死人ささもさ古々の妹  
小夜枕心の闇ハ余はあつ  
むく羽織おしむむ碎ひ  
汎へもえ家すもねよ返り居  
笑ふや態神うさる中も信  
おのつる月の切染の宵ハ時  
羽集の中と色す肌を

木 榮 行 木 榮 行 木 李 行 尚

世に語りハ詔小陵宮のあま斗り  
 飯くらふうちふりく舊お  
 何りもふ葉内よま神保あり  
 一字も讀ぬ英音のみ  
 是れ古の拾もたぬ元の神  
 社日の調ハ慈以よ看  
 春町 田年 尚 蹊 年 町

文久元年

癸亥五月廿一日  
 素清徳と

